
兄弟と美人さん

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄弟と美人さん

【Nコード】

N7232M

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

霧の町で、兄弟は今日も生きている。

兄にはメンテナンスが必要だから、弟は今日も兄の面倒を見る。だが二人には夢がある。町の外の世界へと飛び出すことだ。

ある日、そんな二人の前に、一人の美人さんが現われる。

霧立ち込める、特に特徴の無い町。霧が唯一の特徴と云っている程に、田舎。

だからこの町には『霧の町』という名前が付けられている。何の歴史も感じさせない、単純な名前だ。

だがそれが故に、居場所が無い人間はこの町に集まってくる。濃い霧が一人一人の輪郭をはっきりさせないことも、また居場所を探している人間にとっては、この霧の町が魅力に映える所以だ。

その町にある有名な兄弟がいた。兄は特別な力を持つ人間で、弟はその世話役のようなものだった。

兄の力はこの町を生み出す。つまり、『霧の町』を作り出しているのはこの兄であつた。

兄の特別な力とは、霧を発生させる力なのだ。

そんな彼は一日一回、弟にメンテナンスをしてもらわなければならない。弟は文句一つ言わずそれを成し遂げるが、いつもメンテナンスは不十分だ。本当は、しっかりとした場所でメンテナンスしてもらわないと、霧を正常に発することはできないのだ。

「ごめんねごめんねー」

「構わんよ」

そんな調子で日々を過ごしている兄弟の元に、居場所を探す流れ人の、女性が現われた。なかなかの美人。兄弟は目を丸くしたが、特に嬉しいとは感じなかった。というのも、メンテナンスで忙しかった時に現われたので、それどこではなかったのだ。

美人は長い黒髪で、なんつうか雰囲気が大人数びてる。すごい分別が良さそうで一緒にいて心地良い。そんな美人、なかなかいない。てなわけで、町の流れ人の男共は次々に美人にアプローチ。だがそのどれもこれもを美人は軽く受け流す。

「ごめんなさい」

と、いろいろな理由を作っては男たちをやんわりと回避するのが美人の特技。

そんな彼女は毎日毎日、兄弟の家で寝泊りをする。兄弟は部屋が賑やかになったことを喜び、美人に世界のことをいろいろと尋ねた。兄弟はまだ町を出たことはなかった。何時か町を出てみたいとは思っているのだが、兄はこの家にいないとメンテナンスが出来なくて動けなくなってしまうので、町を出ることは二人にとっての夢なのだ。そのことを美人は聞くと、彼女は途端に目を輝かせて、「私、役に立てるかも」と言って微笑んで見せた。

「ほんとに、ほんとだね!？」

「うん。ほんとうだよ。きっと、出来ると思う」

「期待しちゃうよ、僕達」

「構わんよ」

そうして約一年間。

美人は毎日作業に取り組んだ。時に材料が足りないことがあれば、美人の虜になった男達にそれを取ってきてもらった。美人の特技にかかればそんなことは容易い。てなわけで、兄に対する改良作業は日に日に進み、ある日、遂に兄は進化した。

「こ、これが俺…」

「ふふ、そうよ」

「嬉しいよ、美人さん!」

「それは結構。じゃ、早速旅にようか？」

「「はい!」」

兄弟の元気な声。喜びの声。それを微笑ましく見つめながら、彼女も嬉しそうだった。

こうして三人は、『霧の町』を旅立った。どこまでもどこまでも、三人で旅をした。

獣に襲われた時には、弟自慢のロケットパ○チで軽くぶったおした。

腹が減った時には、兄自慢のブレスト○アイヤーとビーム○ーベルで豚を調理してみんなで食った。

「さっすが君たち！ 私にもそういうことが出来たらなあ」

彼女はそんな風に言って兄弟をよく褒めた。その度に兄弟は照れて、そして喜んだ。

だから彼女がメンテナンスをしてくれるたびに、兄弟たちも彼女を褒めた。いろいろな言い回しを使って、なんとか喜んでもらおうといういろいろ試みた。その度に彼女も喜んでくれた。そんな風に、三人はどこまでもどこまでも、いつまでもいつまでも、旅を続けていった。

彼女が、老婆に変わるときまで。

床に臥した彼女を、兄弟二人は何度も看病した。だが、彼女は日に日に調子を悪くするばかりで、命が尽きるのが時の問題だというのは、兄弟にもわかった。だけど、彼らはひたすらに看病した。そんな二人を彼女は褒める。「ありがとう、ありがとう」ってお礼も繰り返す。そんな言葉に二人は苦い思いを感じながらも、だけど、やっぱり嬉しかった。彼女の声を聞くだけで、二人は毎日が幸せだった。

だけど、人間にはいつか終わりが来る。生物だから。

太陽の差し込んでくる部屋で、老婆は一言、二人に何かを呟いた。小声で、兄弟は聞き取れなかった。だけど、なんとなく兄弟には、その言葉が何であったかはわかった。

兄弟たちは、彼女に「ありがとう」と言った。その言葉を聞いた老婆は優しく微笑み、そしてまた何かを小声で呟く。

そして、息を引き取った。

老婆の墓を、兄弟は、動かなくなるその時まで、守り続けた。誰

かが墓を暴かぬよう、二人は警戒を怠らず、朝も昼も夜もずっと。

だけど、やがて兄にも限界が訪れた。兄はガチャガチャと煩わしい音を鳴らしながら、ゆっくりと動きを止めようとしていた。弟は泣きそうだったが、彼は涙を流したりはしない。

動かなくなる寸前、兄は弟に最期の言葉を呟いた。老婆が二人に呟いた言葉を、今度は兄が、弟に送るのだ。

「お前に会えて、お前と旅できて、よかったよ」

こうして兄は、動かなくなった。

蒼色の空を見れば鳥が飛んでいる。地面を見ればミミズが蠢いている。

そんな風景を見ていれば弟は、さみしくなんかなかった。

弟は、動かなくなるその時まで二人を守った。

そして弟も動かなくなる。

お別れの言葉を、そして感謝の言葉を述べながら。

彼もまた、息を引き取ったのだ。

（後書き）

書いてて、この三人の長編書いてみたくなっちゃいました。
現実でロボットが意志を持つ日は訪れるんだろうか・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7232m/>

兄弟と美人さん

2011年11月13日23時00分発行